

岩手県立高田病院支援活動日記（その2）

I H I 播磨病院 整形外科 西川 梅 雄

今回はちょっと厳しい内容です。被災地の方々のことを少しでも考え、日々普通に暮らしの出来る環境のすばらしさを再確認できればと思い、あえて書きました。

「希望(奇跡)の1本松」の次に行ったのは壊滅した(旧)県立高田病院でした。入り口の左方向に、常に生花が手向けられています。島貫(しまぬき)先生が合掌されるので私も合掌し、正面玄関だったところ(写真①、②)から、立ち入り禁止の黄色のテープ?をまたいで入りました。病院の中は津波が襲った爪痕がそのままでした。屋上まで島貫先生の後について行くのですが、床はガラスの破片、



①壊滅した岩手県立高田病院前で

泥、壁の一部やいろいろなものが散らかったままだ。足元にばかり気を取られていると、天井から様々なケーブルや金属製の枠などが垂れ下がっていて、上にも注意が必要でした(写真③)。津波直後は松の木が病室に突き刺さっ



写真②いつも生花が手向けられている。

ていたそうです。津波は4階の半ば(人の高さ)まで達したので4階の天井だけが残っていました。4階から屋上への踊り場から上の階段と屋上で約170名が、風刃(ふうじん)身を切るような1夜を過ごしたとのこと。何よりも患者さんや職員が二十数名亡くなられたことを辛そうに話されました。また、屋上に機械室のようなところがあり、少しでも暖かいだろうと、そこへ患者さんたちに入ってもらっていたと言う。保温のために、塩水が引いた後の4階からかき集めたタオルや紙おむつなどがまだ残っていた。



写真③天井は抜け、ケーブルや配線が垂れ下がり床はガラス片やボード等の破片が散乱していて足の踏み場もない。

避難したものの夜明けまでにさらに3名の方が低体温症などで亡くなられた。何たる悲惨、何たる凄惨、絶句・・・(写真④)。

次はJR陸前高田駅であった。何もないような所で島貫先生が車を止めたので、ここは何処？と言う感じで私たちは降りました。よく見るとわれわれは何となくプラットホームのようなところに立っている。若干の段差があって、レールらしいものが1本だけ見える。それも途中から無くなっていたり(撤去したところもあるらしい)、土砂に埋もれたりしている(写真⑤)。駅舎のあった跡らしいものがあるが、建物は一切残っていない。消滅している・・・。



写真④県立高田病院屋上にて。正面方向から大津波が来襲した。



写真⑤JR陸前高田駅。錆びたレールが1本だけ見える。

この日、最後に車から降りて見たものは、約50cmの長さに切った松の丸太がゴロゴロ積んである所でした(写真⑥)。8月16日に京都五山送り火(大文字の送り火)で燃やすはずであったあの松の木です。燃やすと決めていて放射能も出ていないものを「心配だから」と中止したという。大文字保存会は松の木を京都に運ばず現地(陸前高田市)で8月8日に「迎え火」として燃やしたそうです。

市内被災地見学の後、午後の診療。午後は受診者が少ないので、合間を使って大澤先生



写真⑥高田松原の松の木の残骸。

が救急用のスペースで手術をするという。手根管症候群の患者さんで、局所麻酔。私も手伝って「鉤引き」をする。約20分で終了。外来の患者さんはほとんど高齢者で、同姓同名も多いとのことで生年月日を1人1人聞いて確認するのが特徴。それとお年寄りが話す東北弁がほとんどさっぱり分からなかったので、付き添いの人や看護師さんに「通訳」してもらったりして何とか大過なく第1日目は終わった。長い長い1日であった。

(次号に続く)

TTAK新聞のバックナンバーは

播磨病院ホームページ <http://www.harima-hp.jp/>からご覧になれます。